

母親哲学カフェ 実施報告

テーマ：「待つ」ということについて

開催日：2018年6月11日（月）

開催内容：

今回は、「待つ」ということについてをテーマとし、大人のみでの参加だけでなく、児童・乳幼児を連れた親子での参加者も集まりました。

まず初めに大人の立場から、どのようなときに「待つ」ということを実感するか意見がだされ、不登校の子どもが学校に行きたくなくなるのを待つ、言われたことを子どもができるようになるまで待つ、子どもに話しかけられたときに少し待ってねと言うなどといった大人・親視点からの率直な意見があがりました。

それに対して子どもの立場からは、母親に少し待ってと言われてからが長く、そのままどこかに行ってしまうというエピソードが紹介され、子どもには子どもなりの意見がありました。子どもにとって、「待つ」ことは「我慢」の感覚に近いようで、ある子どもは、どうして自分の意見を聞いてくれないのかとイライラすると表現していました。

そこから、「そもそも待つことはえらいことなのか」、「待つ行為は悪いことなのか」という疑問が浮上し、育児書などではしばしば子どもには我慢をさせましようと言われていて違和感を覚えるという意見が述べられました。それに関連して、待つことは大事だがそれを無条件に「えらい」行為と位置づけてしまうと、そこにはコミュニケーションが不在になってしまうように感じるという意見が出されました。待たせる理由や、具体的にどれくらい待てばよいのかを説明せずに、一方的に「待って」と言うことは、ある種の暴力に近いという見方のようです。

また、大人の側が「待つ」ことを「えらい」行為とみなす場合、子どもをほめる発言自体が、自分が子どもを待たせたことに対する都合のよい言い訳に聞こえることがあります。社会で生きるうえで、他者の都合にあわせることはもちろん大事ですが、「待つ」ことは「我慢」ではなく、「相手をよく見ること」ではないかという考え方も提示されました。

一方で、とある参加者から、子どもにとっては楽しい「待つ」もあるという意見が出されました。例えば、好きな絵本を読んでもらうという約束は、子どもにとってワクワクするような嬉しい約束です。しかし、その参加者は、子どもに絵本を読んであげるという約束をまだ果たせていないそうです。子どもにとって楽しくない「待つ」時間だったと振り返る貴重な機会となりました。

このことは、「約束とは何か」という話にもつながります。「約束」をめぐっては、以前に別のテーマで哲学カフェを開催した際に、子どもの側から問題提起されたことがあります。その時は、大人はすぐに子どもとの約束を破るのに、どうして大人は子どもに約束を守らせようとするのかという素朴な疑問が提示されました。

以上の対話を通して、待つ側と待たされる側の時間の流れが同じではないこと、「待つ」ということは楽しい「待つ」や楽しくない「待つ」があり、楽しくない「待つ」は少ない方がよいということ、「待つ」ことで頭の整理ができてあえて立ち止まって考えられる利点があるということ、待たせるときにはその「理由」を説明し、理由がわかれば待つ側も「待とう」という気持ちになり、それがお互いの「思いやり」であること、何かを約束した後は進捗状況を伝えることで、待たされている側はそれを知ることにより「安心感」につながるということを改めて確認しました。

今回の対話でもまた、子どもと大人の間で意見が食い違っていたこと、子どもが日頃心の中で思っていたことを遠慮なく大人にぶつけていたことが印象的でした。そして、大人もそれを素直に受け止めていたようで、子どもがこのようなことを思っていたとは驚いた、子どもの素直な気持ちを今初めて聴けたと嬉しそうに述べていました。

対話の途中、子どもからさまざまな不満をきいた母親が、たくさん言いたいことがあったねと話しかけると、今は何を言ってもいい時間だからたくさん言うよと子どもが主張したことは大きな成果でした。これは、まぎれもなく哲学対話の成果です。普段は言えないことを勇気を出して発言すること、そして、そのような場を設定することが哲学対話の目的の1つだからです。これをアメリカの子どものための哲学（philosophy for children : P4C）では、「知的安心感」と呼びます。また、前回の親子哲学カフェに参加した親子のお子さんが、やっと言いたいことを言えたと言えたと笑顔で話してくれという話もきいています。これもまた、哲学対話の成果です。

短い時間でしたが、大人が子どもの話に真摯に耳を傾けて子どもの素直な気持ちを受け入れ、子どもも大人に自分の気持ちを伝えることができました。また、普段は聴くことができない大人の気持ちを子どもも知ることができた貴重な機会となりました。

近年、テクノロジーの発達により、急速に情報化が進んで世の中が便利になり、私たちは「待つ」ことができなくなっているように思われます。今回、「待つ」ということをテーマに、私たち自身のあり方を見直すきっかけとなりました。今後も、このような「普段は考えないことについて、初めからじっくり考える」という哲学対話の場を、さまざまな立場の人びとに広めていきたいと考えています。

